



「闇に輝く光」

理事長・チャブレン 大柴 譲 治

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。ヨハネ 1:5

私はクリスマス時期になると思い起こすエピソードがあります。映画『アポロ 13』(1995)のワンシーンです。アポロ 13 号は 1970 年 4 月 11 日に打ち上げられた月面探査船。J・ラヴェル、J・スワイガート、F・ヘイズという三人の宇宙飛行士が乗っていました。しかしアポロ 13 号は打ち上げられて二日目に電線がショートし、火花が飛んで酸素タンクが爆発・損傷するという致命的な事態を迎えてしまうのです。電力と酸素の供給が断たれたら生命維持ができなくなる。月面着陸のミッションは放棄せざるを得ないどころか地球に戻ることも不可能となる絶体絶命のピンチ。飛行士たちは着陸船を救命ボートに見立てて乗り移り、地上の NASA との手に汗を握るやり取りを通して、自分たちにできる限りの手立てを尽くし消費電力を限界まで抑え、飲料水の摂取を極力控えて無事地球に帰還することができたのでした。この危機に対する対応の鮮やかさによってアポロ 13 号の出来事は「成功した失敗 ("successful failure")」「栄光ある失敗」などと称されています。

私が思い起こす場面は、トム・ハンクス 演じるジェームズ・ラヴェル船長がインタビューの中でかつて海軍のジェットパイロットだった時に体験した事故に言及するシーンです。日本海での夜間訓練飛行中に突然、電気系統の故障でコックピット内の計器を照らすライトが瞬時にすべて消えてしまった。マッハ (時速およそ 1200 キロ) を超える速度です。機が水平に保たれているかを示す水準器も、飛んでいる方向も、残りの燃料

の量も、何も見えません。突然の真っ暗闇。絶体絶命のピンチ。闇の中でラヴェル飛行士は祈るような気持ちになったそうです。何とか自らの平衡感覚に頼りながら機体を水平に保ちながら周囲を視野に入れつつ闇の中を飛んでいたら、しばらくして眼が闇に慣れてきます。すると不思議なことに海がボーッと青白く輝いているのが見えてきたのです。海面に浮かぶ夜光虫の光でした。コックピットが明るいうちには見えなかった弱くかすかな光。それが見えてきた。その光によって海面がどこにあるか、天がどの方向にあるかが分かった。さらによく目を凝らして見るとそこには航空母艦が通った跡がくっきりとひとすじの黒い線になって見えたのです。それは母艦が数時間前に夜光虫を押しつけて通った跡でした。ラヴェル船長は淡々と「それを道標として母艦に帰艦することができたのです」とインタビューに答えて語っていました。

どのような危機の中にあっても決して諦めることなく沈着冷静さを失わない宇宙飛行士。だからこそアポロ 13 号の場合も酸素タンクの爆発/故障という危機を乗り越え無事生還することができたのでしょう。不可能に見えることを可能とした宇宙船と地上のクルーたちの手に汗握る懸命な努力とチームワークも印象に残ります。ぜひ皆さんにも観ていただきたい映画です。

この世の闇の中に救いに至る一本の確かな道筋が地の上に貫かれています。それは目を凝らさなければ見えないようなかすかな光の道なのかも知れません。傷ついた葦を折ることなく、暗くなって行く灯心を消すことのないお方の道なのです。そこにはキリスト

の歩まれた道が浮かび上がり、それはゴルゴダの丘の十字架へと続いています。

私たちは心の目を凝らして神に備えられた人生の道標を見出してゆきたいと思いません。東方からの博士たちの旅もまた星を道標とする夜の旅でした（マタイ 2:1-12）。ヘロデの心が端的に示している人間の闇においてもその光は輝いているのです。そのひとす

じの道こそ、私たちをあふれる喜びといのちと救いへと導くキリストの受肉と十字架と復活の道です。その道へと主は私たちを招いておられます。「天には栄光、地には平和」と歌う天使たちの歌声にご一緒に耳を澄ませてまいりましょう。

お一人のおひとりの上に、メリークリスマス。

「るうてるホームの方々との出会いに感謝」

るうてるホーム評議員 中村 陽子

深めます。

「手当て」という言葉があるように、看護は手を当てることから始まりました。物理的に手を当てるだけでなく、対象者に「心をこめて寄り添うこと」を「るうてるホーム」での実習を通して若い学生達に学ばせて頂きたいと思っています。

我が国の国民医療費は年々増加し続けています。そうした現状から、入院期間の短縮化がすすみ、平均在院日数が2週間を切ろうとしています。「時々入院、ほぼ在宅」という流れの中で私たちの病気への向き合い方も「病院完結型から地域完結型」へと大きく移行しています。そのような中、地域で暮らし続けたいと願う人々にとって、「るうてるホーム」の果たす社会的役割は大きく愛おしいものです。

この度「るうてるホーム」の評議員の任を頂きましたことに深く感謝し、その責任を果たしながら、四條畷の地域づくりをるうてるホームの皆さまと共にすすめていきたいと思っています。

社会福祉法一部改正にともない新しい評議員を設けることにより、本年度より「るうてるホーム」の評議員の任を仰せつかりました。四條畷学園大学はリハビリテーション学部のみ単科大学でしたが、2015年（平成27年）4月に看護学部が設置されました。私は、看護学部で在宅看護学の教員をしています。2016年から、「るうてるホーム」のケアハウス、デイサービス、ジョイフルるうてる等において、在宅看護学実習をさせて頂いております。

この実習では、病や障がいを持ちながら地域で暮らす人々の生活を知り触れ合うことで、在宅(地域)での暮らし、生き方、価値観を学ぶことを目的にしています。また、暮らしを支援する様々な人々の思いや活動を知ることも大切にしています。そして、「るうてるホーム」設立の精神でもある、「どのような心身の状況にあっても自分の生活を自分らしく続けることができるよう、努めます」という言葉のとおり、住みなれた場所でその人らしい暮らしを維持することの重要性についても、この実習で学びを

「評議員一年生」

るうてるホーム評議員 靄山 昭恵

ぞよろしく願いいたします。

50余年の「るうてるホーム」の歴史と歩みを振り返る時、諸先輩姉妹方の大きな働きに、頭が下がる思いです。当時の婦人会連盟(現女性会連盟)の会長をはじめ、多くの方々のたゆまぬ努力とお支えにより今日があるのだと、改めて感謝申し上げます。合

この度、評議員という大役をお引き受けすることになった、日本福音ルーテル京都教会の靄山昭恵と申します。

お話をいただいた時、その任の重さに、私で務まるだろうかと祈りつつ自問自答いたしました。が、神さまのお導きを信じ、主にお委ねして、お引き受けしました。どう

わせて、歴代の役員の方々、職員の方々、地域の方々、そして後援会の皆さまの長年に亘るお祈りとお支えにも、感謝いたします。


私が「るうてるホーム」を初めてお訪ねしたのは、西教区女性会役員を担っていた2004年でした。まだ以前の場所にあり、建物自体も老朽化してはいましたが、出迎えてくださった皆さまが、大変温かく接してくださったのが印象的でした。一緒にいただいた昼食が、とても美味しかったのを覚えています。その後、女性会連盟役員4人で訪問した時も、その雰囲気の良いさに他の役員共々「るうてるホーム」の働きの大切さと存在の意義を深く認識しました。

今は建物が新しくなり、設備も当時とは比べものにならないほど整いました。日々接する職員の皆さまの温かさが、いつまで

も引き継がれていきますようにと願っています。

これからも、主によって支えられ、人と支えあう、その理念のもと歩んでいく施設であってほしいと思います。利用者お一人お一人が主役であること、そして地域にも開かれた「るうてるホーム」であり続けますように。その笑顔のまん中には、いつも主イエス・キリストがいてくださいますように。

すばらしい働きの一端を担うことになり、責任を感じると共に、お導きに感謝します。評議員としては、まだほんの一步あゆみ始めたばかりです。皆さまのご協力とご助言をよろしくお願いいたします。主と共に。祈りつつ。



「ルーテル社会福祉協会総会・るうてる法人会連合研修会に参加して」

2017年8月21日～23日の3日間の日程で「ルーテル社会福祉協会総会」「るうてる法人会連合総会」が、それぞれ熊本にあるキリスト教児童福祉会こどもLECセンターと九州ルーテル学院で行われました。

私達るうてるホームの職員も大柴理事長をはじめ、常務理事、各事業部部長、各部署の主任の合計8名で参加いたしました。

3日間の熊本研修を通して学んだことは、ルーテル教会の歴史と繋がりの中に今の私達があるのだと言う事です。

ルターの教えをもとに宗教改革が起こり、その後500年の歴史の中で自分や他者とどのように関わるのか、についての礎が築かれてきたのではないのでしょうか。私は、今現在のるうてるホームの理念やその継承に目が向いていましたが、今に至るまでの過去の大切さを感じました。ルターについても勉強不足を感じました。そして、「いったい何を言ったのだろうか」「何を行動したの

るうてるホーム相談員 丸井 修

だろうか」と興味がわいてきました。これから勉強していきたいと思います。

また、熊本を中心に教会の活動の実践が起こり、それから教会活動や学校や児童施設や高齢者施設などの福祉施設へとさまざまな形で全国に広がっていったことを知りました。総会に参加することで、ルーテル教会に関係のある組織の大きさを知りました。

私が初めて耳にする施設があまりにも多くて圧倒されました。とても大きな組織の中に私たちは所属しているのだと実感しました。組織間の横の繋がりを大切にしながら、これから先の未来を共に創り続けて行くのだと思いました。

あまりにも深い縦の歴史と横に広がる組織の大きさの中では、自分の小ささを感じますが、その中で自分は何をする者なのかを考えながら、自分にできることを行っていきたいと思っています。

